

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

(56)

石原 昌家

本連載は読者からの電 国人斬首場面の目撃者のよ 話や手紙などによって、内 容に広がりを持つてきたり している。前回の第55回② 019年12月13では中国 海南島での戦時体験の聞き 取りを紹介した。ほとんく、 東大阪市在住の小渡照生さ ん(冒頭高校同窓生)から手 紙が届いた。開封し、読み始 めるやくきづけになった。

小渡さんの父は、連戦 父は、なんと中国人を斬首 記事内容と同じ海南島で中 した側の日本軍部隊兵士だ



小渡有得さんが短歌や詩などを投稿し、銀メダルを受賞した全国誌『日本少年』(昭和3年)



小渡有得さんが投稿した短歌が1位、詩が2位になるなどして掲載された一中校内誌『養秀』(昭和4年)

つたのである。二人の証言 内容を裏付け、さらに日本 軍の所業の父の記録を照生 さんは手紙にしたためてく れた。

記録の経緯

照生さんの父・小渡有得 さんは、中国福建省から渡 来した渡来人・久米三十六 姓のうちの蔡崇の末裔(19

読者からの手紙(上)

中国人斬首を目撃 父が戦時下の海南島に

父が戦時下の海南島に

世)で、いわゆるクニダ ンチュ(久米村人)である。 1913年生で、27年には 県立第一中学校(現在の首 里高校)に入学したが、在 学中から短歌・詩や文に秀 でていた。全国誌『日本少 年』や一中校内誌『養秀』 に投稿して銀メダルを受賞 したり1位、2位に入賞し たりするほど、見聞きした ことを表現する能力に長け ていた(写真参照)。

の総合月刊誌『青い海』の編 集デスクで培った取材・編 集力が最大限に生かされた であろう。父の貴重な記録 の記録と重なるというのが 是、小石のつづみやきー或る クニダンチュ(久米村人) の95年、心の軌跡①(20 08年、琉球新報社)として 編纂され、発刊された。

府交通局通信部に勤務して いたが、日中戦争のさなか の39年7月、台湾の日本軍 に配属され、海南島へ派遣 された。12月初旬まで同島 に駐屯したのち、同年12月 から中国大陸(江西省)を 駆戦した。さらに40年半ば から41年正月を過ぎて、台 湾に帰還するまでの5月17 日まで海南島に駐屯し、6 月に召集解除となった。戦 争に関する短歌等は、この 間の体験記録であり、前回

まず、随想「戦地海南島 の思い出」には、8月(39 年)海南島へ上陸したが、 「海南島は共産軍の勢力の 強い所と聞かされていた。 「あの日、強い陽さしの降 りそそぐなかを、兵隊たち が海岸の方へ歩いて行っ た。それはまるで、祭りへ 急ぐ人の群れのようなだっ た。密偵の処刑を見に行こ う、というのである。将校 たちはこの時とばかり、新 刀の試し斬りをするのだと

「こでいう密偵」というの は、日本軍の内情を探りに 来ていた中国軍のひと、と いうことだろう。有得さん は、二人の証言のような生 々しい表現をさけている が、「戦地海南島の思い出」 の随想のなかには、二人の 証言者の語りと似たような 描写が記されている。「あ る所では、後ろ手に縛られ たまま、黒焦げになった小 さな死体や、真昼の陽の下 に、ゴロゴロころがってい る数十の、顔かたちもその ままの死体もあった。小さ な田舎町の市場らしい所を 通った時、兵隊ではなく、 普通の中国服を着た男が、 路上に倒れていた。その体 から、なまなましい血が、 ドクドクッと流れてい た。彼の故郷であろうこの 地面が、やがて彼の血をす べて吸い込んでしまっただろ う(333頁)。この場 面は、二人の証言者の語り そのものである。有得さん の年譜には、自分の所属す る部隊名は台湾第一連隊第 三天隊と記しているの、 高宮城さんと屋良さんが記 憶していなかった軍属とし て所属していた部隊名を有 得さんは記録していたとい うことになろう。

さらに「戦に追われ逃れ した人々が残せる空家にわが 軍靴の音、踏み込みし我等を 咎める如し鍋に冷えたる 粥の白きが(38頁)には、 先祖の地を侵略していた クニダンチュの心情が込 められているように見え る。(次回も小渡照生さんの 手紙の内容を紹介する) (次回は21日掲載)

侵略・占領

有得さんは、皇軍兵士と して先祖の地を侵略し、占 領していった状況も短歌に 託している。「侵略」の標 題では「兵士等を下ろすや 母船に引返す舟艇の往来休 む間もなし、舟艇に低く構 へて暗闇を窺い居ればわが 喉の鳴る 間をおきて撃ち 合ふ音の聞こえくる後方に 吾等暫くを待つ」と、攻め 入るときの緊張につづき、 「占領の印を地図に書き入 れて日々我等は心臓りぬ 占領の式を終へし兵士 等が無人となれる家に入 入りす、陽の匂ふ粉千す庭に 引出せし女一人を兵等困め り(37頁)」と、侵入者の 心情と合わせて、捕らわれ た住民の慄きも伝えてい る。